

I 2016年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016年度大学評価結果総評】

能楽研究所は、研究・教育活動実績として、国際研究集会、資料展示、複数回のシンポジウム等で国内外に発信したことは、非常に有意義であり高く評価できる。各種関係機関や団体と連携し発表している研究成果は対外的に高く評価されている。また、芸能史研究や各種論文が学会誌や学術誌に掲載され高い評価を受けていることも優れた成果である。今後のさらなる発展を期待したい。

科研費等外部資金の応募・獲得状況は、関係者が科研費を獲得しており、高く評価できる。

質保証活動については、運営委員会を月1回開催しており適切に運営されている。

【2016年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400字程度まで）

大学評価委員会から高い評価を受けている状況に安住することなく、今後も能楽研究所の研究成果の社会に向けた積極的な発信、学界における更なる評価の向上、教育プログラムの推進など、より高い目標に向けた多様な取り組みを行っていききたい。具体的には、海外の学生に向けた能楽教育プログラムの充実、英語版能楽全書、能楽資料デジタルアーカイブの拡充などを当面の課題とし、学内外の研究者と手を携えて、能楽研究所の「さらなる発展」につとめる。

【2016年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

能楽研究所の国際的な拠点としての高い評価は、優れた研究・教育活動や組織運営に裏打ちされている。能楽研究所は2016年度の大学評価委員会より高い評価を受けているが、引き続きこの水準を維持した質の高い研究活動が推進されている。2016年度の評価は、今後の躍進を期待するものであり、2017年度も新たな取り組みによる研究所のさらなる発展が期待される。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

(1) 点検・評価項目における2016年度の現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

はい いいえ

【2016年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

1) 能楽研究所運営委員会

構成員

- 山中玲子 法政大学能楽研究所所長
- 宮本圭造 法政大学能楽研究所教授
- 星野 勉 法政大学文学部教授
- 阿部真弓 法政大学文学部教授
- 伊海孝充 法政大学文学部准教授
- 鈴木 靖 法政大学国際文化学部教授
- 竹内晶子 法政大学国際文化学部教授
- 岩月正見 法政大学デザイン工学部教授
- 高村雅彦 法政大学デザイン工学部教授

活動概要

原則として月一回、運営委員会を開き、研究所の活動の検証を行っている。2016年度は4月、6月、9月、10月、11月、1月、2月、3月に実施。

2) 文科省認定の「能楽の国際・学際的研究拠点」の運営委員会

構成員

- 増田正人 学術支援本部担当常務理事
- 山中玲子 法政大学能楽研究所所長
- 宮本圭造 法政大学能楽研究所教授
- スティーヴン・ネルソン 法政大学文学部教授
- 竹内晶子 法政大学国際文化学部教授

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

坂上 学 法政大学経営学部教授
 稲田秀雄 山口県立大学国際文化学部教授
 大谷節子 成城大学文芸学部教授
 観世喜正 観世流能楽シテ方、能楽協会理事
 佐藤禎一 元ユネスコ日本政府代表部大使、東京国立博物館名誉館長
 竹本幹夫 早稲田大学文学学術院教授
 マイケル・ワトソン 明治学院大学国際学部教授

活動概要

原則として年に一、二回、専門委員会を開き、研究拠点としての活動の検証を行っている。2016年度は2017年3月に実施。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※上記(1)～(2)の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

能楽研究所の質保証は、月1回の運営委員会と年1～2回の専門委員会の中で議論されている。質保証に関する独立委員会が設置されていないが、これは研究所という組織の規模を考えると妥当な判断と言える。

2 研究活動

【2017年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2016年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2016年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

- 1) 研究会「作品研究〈籠祇王〉」能楽学会との共催 7月1日（参加者30名）
- 2) 茂山家×なごみ狂言会チェコ東京公演「笑いは国境を越える」 於矢来能楽堂 7月27日（参加者190名）
- 3) 英語版能楽全書作成のための研究集会と編集会議（非公開） 7月28～30日（参加者14名）
- 4) 作品研究セミナー・シンポジウム（非公開） 9月11日（参加者13名）
- 5) 研究会「幕末期大蔵流台本「悪太郎」の実態と声による復元」能楽学会との共催 9月30日（参加者30名）
- 6) 第19回能楽セミナー「能をめぐる学際研究」 於スカイホール 10月8日（参加者70名）
- 7) 研究集会「国語学から見た能楽伝書」 10月16日（参加者35名）

場所は特記したもの以外は全てBT会議室

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ジャーナル6号

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2016年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

*研究所としての刊行物

- ・紀要『能楽研究』41号（専任所員の論文二本、兼担所員の論文二本、外部からの寄稿・投稿三本などを収録）
2017年3月刊
- ・能楽研究叢書6『近代日本と能楽』（外部の研究者を含め、九本の論文を収録。口絵を含め全376頁）
2017年3月刊
- ・能楽研究叢書7『金春家文書の世界』（外部の研究者を含め、七本の論文を収録。口絵を含め全202頁）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2017年3月刊

*専任所員の研究成果

- 山中玲子 『御世話筋秘曲』の解説と復元の記録(『能楽研究』41号)
『新時代への源氏学』第十卷(共著、竹林舎)
『ともに読む古典』(共著、笠間書院)ほか
- 宮本圭造 「御家石橋」の成立と相伝の経緯(『能楽研究』41号)
『近代日本と能楽』(編著、能楽研究所)
『金春家文書の世界』(編著、能楽研究所)
『世阿弥を学び、世阿弥に学ぶ』(共著、大阪大学出版会)
「徳川家康の政治戦略と能」(『観世』第83巻5号～第84巻3号)ほか

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

③研究成果に対する社会的評価(書評・論文等)

※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して2016年度に書かれた書評(刊行物名、件数等)や2016年度に引用された論文(論文タイトル、件数等)の詳細を箇条書きで記入。

- ・本研究所の多年にわたる研究協力に対し、6月、日本芸術文化振興会から感謝状が贈られた。
- ・10月に開催した能楽セミナー「能をめぐる学際研究」が11月4日付『読売新聞』夕刊に取り上げられた。
- ・能楽研究において最も権威ある学会誌『能と狂言』14号掲載の論文2本に、専任所員2名の論文がそれぞれ引用されているほか、『藝能史研究』216号の書籍紹介欄に、専任所員1名が監修・執筆を行った国立能楽堂の企画展図録が、『金春月報』に専任所員1名の論文が取り上げられている。
- ・紀要等では、『能楽研究』41号掲載の論文1本に専任所員1名の論文が引用されているほか、『神戸女子大学古典芸能研究センター』10号掲載の論文1本にも専任所員1名の論文が数回にわたって引用されている。2016年度に刊行された全ての書籍・論文を検索したわけではなく、引用の総件数を具体的に挙げることは出来ないが、以上の例から、参照すべき業績として学界で高く評価されていると言える。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

④研究所(センター)に対する外部からの組織評価(第三者評価等)

(～400字程度まで)※2016年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

定期的な外部評価は受けていないが、文科省の共同利用・共同研究拠点として毎年細かなチェックを受けている。2016年度には、文科省の研究支援係長による現地調査が行われ、アドバイスを受けた。また、2013年度から三年間にわたる「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」の事後評価が行われ、「A:事業の目的は概ね達成された」と高い評価を得た。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」事後評価結果について(通知)

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2016年度中に応募した科研費等外部資金(外部資金の名称、件数等)および2016年度中に採択を受けた科研費等外部資金(外部資金の名称、件数、金額等)を箇条書きで記入。

*2016年度中に応募した科研費等部位部資金

- ・学術研究振興資金「能楽の国際参照標準確立と多面的展開に向けての総合研究」(採択。100万円+学内予算220万円)(2017年度分)
- ・文科省補助金「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業 機能強化支援」(不採択)

*2016年度中に採択を受けた科研費等外部資金

- ・学術研究振興資金「能楽の国際参照標準確立と多面的展開に向けての総合研究」(140万円+学内予算308万円)
- ・科学研究費補助金基盤(B)「能楽及び能楽研究の国際的定位置と新たな参照標準確立のための基礎研究」(研究代表者:山中玲子、2016年度390万円)
- ・科学研究費補助金基盤(B)「能楽資料データベース構築に向けた金春家文書の総合的研究」(研究代表者:宮本圭造、2016年度180万円)

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

・特になし

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

特になし

【この基準の大学評価】

能楽研究所の研究・教育活動実績として、研究会・セミナー等が 7 回、対外的に発表した研究成果として、刊行物が 3 件、さらに専任教員の多くの研究成果が著書等として発表されており活発な研究活動が繰り返されていることが伺える。また、日本芸術文化振興会からの感謝状の贈呈、「能をめぐる学際研究」が読売新聞紙上で紹介されるなど社会的な評価が高く、かつ学術的にも能楽研究所関係者の多くの論文が引用されることから、社会・学術両サイドから高く評価されると判断される。

一方、外部評価の一環として、これまでの拠点として能楽研究所の「特色ある共同拠点の整備の推進事業」が A 評価を受けたことは特筆される。外部資金も科研費基盤 B に 2 件採択されるなど、高いレベルの研究がなされていることは能楽研究所の高い研究力が反映されていると判断され、これは極めて高い評価に値する。さらに、研究所の Journal16 には、理工系の教員によるコメントが記されている点にも注目したい。これは能楽という特定分野に専門外からの意見を求めるものであり、このような柔軟な取り組みは、大いに評価されるべきものであろう。

III 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

該当なし

【2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

該当なし

【大学評価総評】

能楽研究所の研究・教育活動は、実績として十分な研究成果があり、活発な研究活動が継続的になされていることは特筆に値する。また、日本芸術文化振興会からの感謝状の贈呈、研究所の学際研究が新聞に掲載され、学術論文の引用数も多く社会・学術両面から高い評価を受けていることも優れた成果である。

一方、外部評価結果として、「特色ある共同拠点の整備の推進事業」が A 評価を受けたことは、優れた研究活動が客観的にも認識されていることを示しており、これまでの研究所の活動に敬意を表したい。外部資金も科研費基盤 B に 2 件採択されるなど申し分ない。

質保証活動も運営委員会を月 1 回開催しており、適切に運営されている。能楽研究所の国内外の研究拠点としてのさらなる躍進に期待したい。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。